



令和2年度 国史跡船原古墳講演会資料集

日時 令和2年11月28日(土) 14時開始

会場 リーパスプラザこが交流館 多目的ホール

主催 古賀市教育委員会

主催者あいさつ

本日は、令和2年度国史跡船原古墳講演会にご参加いただきありがとうございます。

古賀市教育委員会におきましては、平成25年3月に発見された船原古墳の土坑群とその出土品の調査を継続して行なっておりますが、その過程で金銅製歩揺付飾金具、ガラス装飾付金銅製雲珠・辻金具、馬冑など、驚くべき発見がいくつもございました。今回の二に連三葉文心葉形杏葉れんさんようもんしんようけいぎょうようの玉虫装飾についても、国内であまり例がない稀少なものであり、玉虫装飾がある馬具としては国内初の発見ということから、船原古墳の被葬者が当時相当な権力を持った人物であったということをお知らせしていただくとともに、私どもに伝えてくれる発見となりました。

本日は、この新たな発見について皆様にご報告するとともに、ご講演ではこれを含めたこれまでの調査成果を受け、九州歴史資料館の吉村靖徳先生に船原古墳の被葬者像についてお話しいただけることとなっております。

今回の講演会を通じて、より多くの方々に船原古墳への関心を持っていただき、今後の遺跡とその出土品の保存にお力添えいただければ幸いです。

令和2年11月28日

古賀市教育委員会

教育長 長谷川 清孝

プログラム

- 14:00 開会のことば
- 14:05 市長あいさつ
- 14:10 報告 西 幸子「国宝級の発見！？タマムシで装飾された馬具」
- 14:30 質疑応答
- 14:35 休憩
- 14:45 講演 吉村 靖徳「船原古墳とその被葬者像」
- 15:45 質疑応答
- 15:55 閉会のことば

西 幸子（古賀市教育委員会文化課）

はじめに

平成 25 年 3 月に発見された船原古墳 1 号土坑の出土遺物は、多湿という好条件に恵まれた結果、金属器のみならず木質や繊維等の有機質が多く残っていた。そのため、遺物は九州歴史資料館の全面協力の下、現場では各遺物を分離せずにブロック単位で取り上げ、持ち帰った室内でクリーニング作業をしつつ、各遺物の検討、有機質の分析を進めている。

令和元年度までの整理作業で、小札甲・冑以外の遺物のクリーニング作業が一旦終了し、これまで X 線 CT 画像ではわからなかった遺物の細部観察ができるようになってきた。そして調査を進めた結果、今回新たに二連三葉文心葉形杏葉の装飾に、昆虫のタマムシの翅を用いていることが確認された（以下、「玉虫杏葉」⁽¹⁾と呼ぶ）。

玉虫装飾品は古代の日本列島と朝鮮半島で確認されているがとても希少で、国内例のほとんどは国宝指定品である。また、韓国では玉虫装飾馬具が見つまっているが、日本では船原古墳の玉虫杏葉が、馬具として唯一の確実な出土例である。玉虫杏葉の希少性やそこから想定される朝鮮半島との関係などは、船原古墳の特異性、そして歴史的意義を解明する上で注目される遺物である。以下、玉虫杏葉についてこれまでの調査で分かった内容を報告する。

1. 二連三葉文心葉形杏葉の形状

玉虫装飾が確認されたのは、二連三葉文心葉形杏葉である（図 3）。杏葉は馬の胸や尻を飾るペンダント状の装飾を目的とした馬具で（図 2）、二連三葉文心葉形玉虫杏葉は 1 号土坑南側の斜めに木箱が置かれたと考えられる箇所中央付近から 1 点だけ出土した（図 1）。玉虫杏葉はハートの形（＝心葉形）の外形を呈し、真ん中には葉っぱのような形をした三葉文と呼ばれる文様が葉先を上に向けて二対、左右対称に配置される金銅製の文様板を挟んで装飾されている。タマムシの翅は、この金銅製の文様板と下地の鉄板の間に挟まれていて（図 8）、文様板の隙間から覗くようになっている（図 5）。CT 画像を見ると、使用されたタマムシの翅の枚数は約 20 枚。この内一枚は翅先を切断した痕跡が確認できる（図 9）。

2. 超高級品？玉虫装飾馬具

古代の玉虫装飾品は、これまで日本列島と朝鮮半島合わせて 12 か所でのみ確認されている（表 1）。この内、玉虫装飾馬具は韓国の 5 世紀代の新羅の王陵級古墳でしか出土していない。当時、新羅では馬具の杏葉の外形や文様、使う材料（金・銀・銅）に階層分化があったと指摘されているが、その中でもタマムシを材料とする馬具は、階層ピラミッドの頂点に位置する馬具である（諫早 2012）。つまり、最上位階級者の馬だけを飾った最高級品の馬具である。

日本国内では、有名な法隆寺玉虫厨子のほか、世界遺産沖ノ島、正倉院中倉でタマムシの装飾品が見られ、ほとんどが国宝に指定されているが⁽²⁾、馬具に玉虫が使われた確実な例はこれまで見つからない。本玉虫杏葉は、日本国内で唯一確実な玉虫装飾馬具と

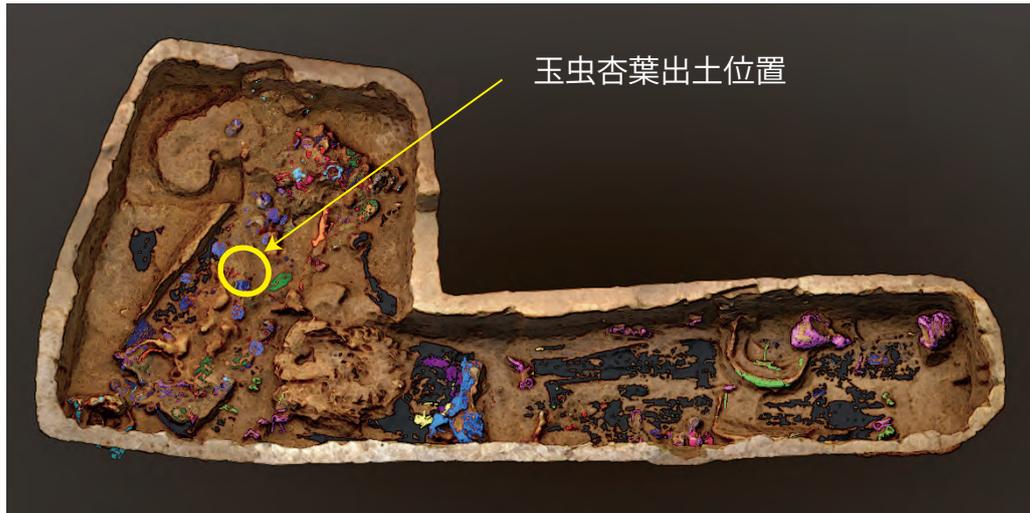


図1 船原古墳1号土坑3Dアプリ画像

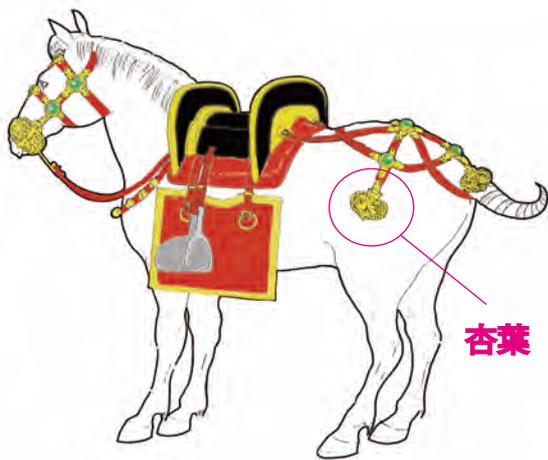


図2 船原古墳馬装復元図
(心葉形鳳凰文杏葉のセット)



図4 二連三葉文心葉形杏葉(玉虫杏葉)
想定復元3D画像



図3 二連三葉文心葉形杏葉(玉虫杏葉)



図5 玉虫の翅アップ
(文様板の下に敷き詰められている)

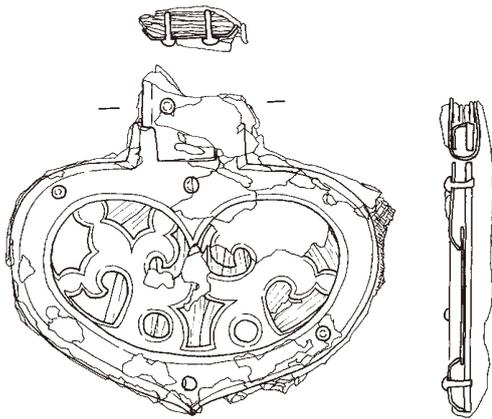


図6 二連三葉文心葉形杏葉の実測図 (S=1/2)



図7 二連三葉文の文様板（金銅板）

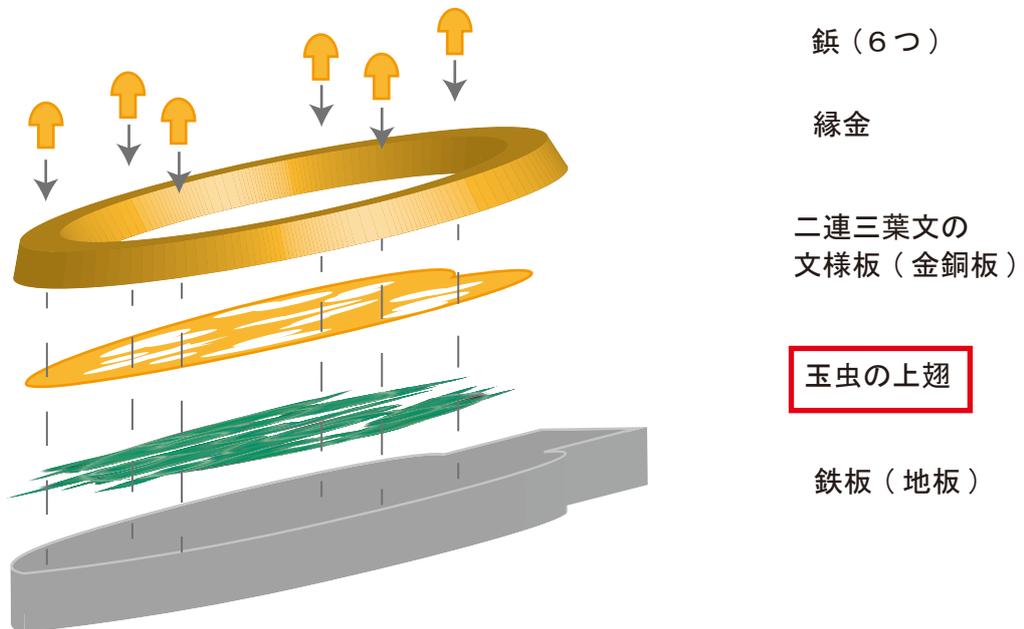


図8 二連三葉文心葉形杏葉（玉虫杏葉）の構造図

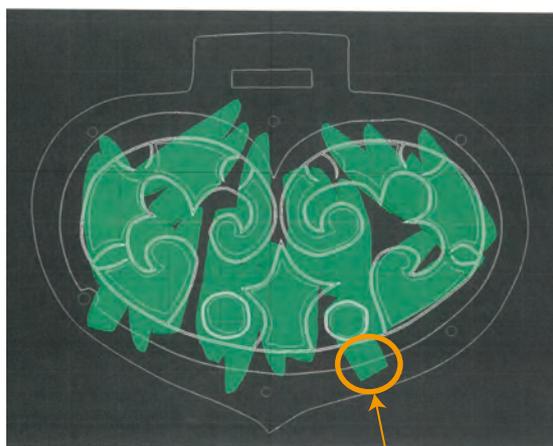


図9 CT画像でみられる玉虫の翅の残存状況
翅先が切断された翅

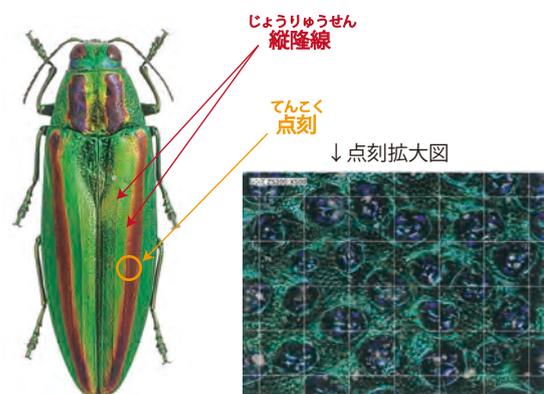


図10 玉虫の各部名称

して、入手した経緯や半島との交流関係など、学術的に注目される。

3. 今後の課題～あなたは何タマムシ??

この茶色になってしまったタマムシの翅は、本来何色に輝いていたのか。玉虫杏葉の本来の色を探るため、昆虫学者の先生にも実見していただき、種類の同定も進めている。上翅に見られる点刻や縦隆線からはタマムシで間違いなさそうで、ヤマトタマムシと一致すると見る研究者もいる。詳細は引き続き検討していく必要がある。

註

1. 昆虫の名称としては「タマムシ」、考古資料の名称としては「玉虫」と表記している。
2. 宮崎県西都原古墳群 169(旧 110)号でも、鏡の鏡面からタマムシの翅が2枚出土したと報告されるが、今現在翅は現存していない。

参考文献

- 諫早直人 2012『東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』雄山閣
 桃崎祐輔 2018「沖ノ島の馬具」『世界の中の沖ノ島』季刊考古学別冊 27

表1 これまでに確認された古代の玉虫装飾品(日本・韓国)

番号	遺跡名	所在地	器物	タマムシ		時期
				種類	現状	
1	西都原169号墳(旧110号墳)	宮崎県西都市	小型仿製鏡鏡面上	不明	玉虫色なし	5世紀前葉～中葉
2	皇南大塚南墳	韓国慶州	鞍橋	日本産タマムシ亜種	玉虫色あり	5世紀中葉
			鳥嘴形金具			
			鏡板			
			木芯金銅板張鏡			
			扁円魚尾形杏葉			
			雲珠(辻金具)			
			銀製裝飾付三角形裝飾			
金銅製袴帯						
3	皇南大塚北墳	韓国慶州	鞍橋			5世紀中葉
			把手			
			鏡板			
			金銅製帯飾金具			
			扁円魚尾形杏葉			
4	金冠塚	韓国慶州	鞍橋	ヤマトタマムシ		5世紀後葉
			鏡			
			鉄地金銅張扁円魚尾形杏葉			
			玉虫飾(布に縫い付ける)①			
			玉虫飾(布に縫い付ける)②			
障泥						
5	皇吾里16-2・3号墳	韓国慶州	扁円魚尾形杏葉			6世紀前葉
6	皇南洞100番地1号横石木柳墓	韓国慶州	扁円魚尾形杏葉			6世紀代
7	鷄林路14号墳	韓国慶州	心葉形杏葉			6世紀前葉
8	真坡里1号墳	北朝鮮平安南道中和郡	胡篋金具			6世紀前葉
9	沖ノ島7号遺跡	福岡県宗像市	飾帯先(羽子)		玉虫色なし	7世紀前葉
			絞具(羽子)		玉虫色なし	
10	法隆寺金堂	奈良県斑鳩町	玉虫厨子	ヤマトタマムシ	玉虫色あり	7世紀中葉
			広目天立像			
			多目天立像			
11	正倉院中倉	奈良県奈良市	刀子	ヤマトタマムシ	玉虫色あり	8世紀
			矢	ヤマトタマムシ	玉虫色あり	
			鴨毛屏風・鳥毛女屏風の金具の下??			
12	船原古墳	福岡県古賀市	心葉形二連三葉文杏葉	調査中…	玉虫色なし	6世紀末～7世紀初頭

1 地理的・歴史的環境

船原古墳は福岡県北西部の玄界灘に面した糟屋地域北部に位置する。地形的には、北は城山から湯川山に至る宗像四塚連山に、東から南にかけては犬鳴山系と立花山の峰によって限られ、西側は玄界灘に開けている。古墳は犬鳴山系から玄界灘に向かって派生する舌状丘陵の先端頂部に立地する。

糟屋地域北部の首長系列に位置づけられる有力な古墳としては、谷山川の下流域にあたる花鶴川左岸、玄界灘を見下ろす丘陵上の永浦古墳をあげることができる。永浦古墳は径 25 m 前後の 5 世紀代の円墳で、箱形石棺から眉庇付冑・鋌留短甲・肩鎧などの武具のほか多量の武器が出土していて、武人的な被葬者像が浮かぶ。



図1 船原古墳と古代宗像郡の領域

現在の古賀市は糟屋郡に含まれるが、古代においては新宮町立花山と三本松山を結ぶラインが宗像郡の範囲となり（大高 2017）、古代宗像郡の南端部にあたる。船原古墳が宗像郡に含まれることは宗像地域に特徴的な石室・墳丘構築技術、出土土器の検討によっても追認されている（小嶋 2012）。

2 領域における船原古墳の墳丘と石室のあり方

(1) 墳丘形態と規模

前方後円墳という墳形は、古墳時代の当初よりヤマト政権との直接的あるいは間接的な関係の中での地域首長の序列を示すステイタスとして採用された。その秩序は大型円墳や方墳が権威の象徴として前方後円墳にとって替わる古墳時代の最終段階まで維持された。福岡県内の前方後円墳は 11,000 基の古墳のうちわずか 200 基程度で、船原古墳の墳形は前方後円墳体制の最上位に位置づけられる。後期以降は墳丘規模が概して縮小化する傾向にあるものの、その最終段階（小田編年 IV A 期 / TK209 併行期）にあたる前方後円墳であること自体が船原古墳の被葬者の階層性を示す。以下、当該地域における船原古墳の墳丘と石室の位置づけを確認しておく。

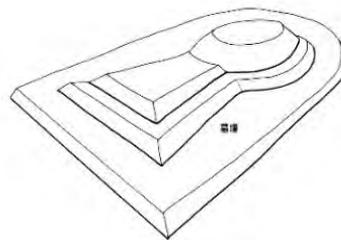


図2 勝浦峯ノ畑古墳模式図

船原古墳の墳丘で特徴的な点は、後円部に比べて前方部が著しく低い「見瀬丸山型前

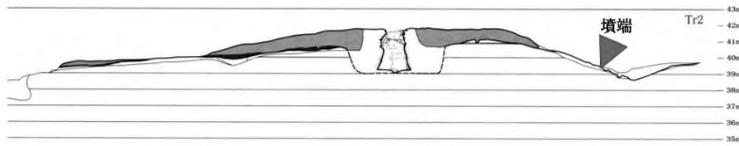


図3 地山整形による墳丘と石室の掘方

方後円墳」(森下・甲斐 2016)、省力化しつつも墳丘を大きく見せるために「段差」を意識していること、の2点が挙げられる。前者は宗像市桜京古墳や、福津

市大石岡ノ谷2号墳など胸形氏(胸肩氏)の奥津城である津屋崎古墳群をはじめとした宗像地域で8例と類例が多い。後者については、船原古墳の築造観念に津屋崎古墳群中に複数にみられる「基壇」(池ノ上 2011)に通じる「段差」が内包されており、共通性が認められる(小嶋 2018)。船原古墳の墳丘の整形が地山削り出しによっている点は胸形君首長墓系列の最後の前方後円墳となる在自剣塚古墳とも共通する。

全長は前方部の墳端が削平されているものの45m程度と考えられる。後円部の径が24.8mと、この部分だけとれば直径25m前後をひとつの目安とするいわゆる大型円墳の類に入る。船原古墳の次の段階にあたる福津市手光波切不動古墳は墳丘周囲が削られ正確な規模はわからないが、径25mほどの円墳で(井浦 2013)、円丘部のみを単純に比べると同等の規模を有する。手光波切不動古墳は津屋崎古墳群に含まれ、在自剣塚古墳と宮地嶽古墳の間を埋める時期の胸形君の首長墓系列に位置づけられる。

(2) 埋葬施設

船原古墳の埋葬施設は、主軸に直交し遺物埋納坑側に向かって開口する複室構造の横穴式石室で、長さ2.4m、幅2.0mを測る。後期から終末期にかけての大型墳と比べるとやや見劣りはするが、複室構造であること、玄室の三壁に一辺2m以上の巨石を用いる点は、一般成員の石室の構造・規模とは明らかに一線を画する。

石室の掘方は、地山を比較的深く掘り込んでいて、また側壁を直立させずに内側に傾けるなど合掌形の横断面形状を意識している。石室の構築にあたって地山を極端に深く掘りこむような典型的な事例とはいえないものの「宗像型石室」に通じる。

その他の特徴では、墓道の両側に長さ4mにわたって石積みを行っている点は糟屋北部～宗像地域の石室としては異例といえる。こうしたものは、みやこ町橘塚古墳など京築地域や筑豊地域に類例が多い。前項でみた胸形君系列の首長墓に位置づけられる手光波切不動古墳の石室は、畿内の横穴式石室の影響をダイレクトに受けた横穴式石室だが、船原古墳はその前段階の在自系石室を採用している。

石室に関しても、墳丘にみられる特徴と同様に、造墓方法とその背景となる観念は胸形氏一族に包括された被葬者像を示している。

3 土坑群と葬送儀礼

(1) 土坑群の位置づけ

石室が開口する南側(石室の正面)で7基の土坑が墳丘外の墳裾に沿って並んでいる。2号土坑上層出土土器は、墳丘や4号土坑、5号土坑から出土した土器と接合する。また、3・6・7号土坑は、1号土坑と5号土坑との間に挟まれ筋を合わせることから古墳と一連の遺構と捉えることができる。このうち絢爛豪華かつ多量の馬具や武具、武器類を埋納した1号土坑は例をみない遺構である。ここでは、被葬者像にアプローチする前提作業とし

て土坑群の性格を考えてみたい。

福岡県内では6世紀後半から7世紀にかけて群集墳クラスの小規模な古墳の墳丘に近接して土坑が存在する事例が散見され、船原古墳の土坑群の性格を紐解く際の参考になる。

小郡市三沢遺跡（宮田 1990）や古賀市中里古墳群（井 2005）、宗像市大井三倉遺跡（酒井 1987）、筑紫野市諸田仮塚遺跡（小川 1998）などでは、群集墳を構成する小円墳に付随する土坑群

において馬の埋葬を示す痕跡が確認された。三沢遺跡では、ⅢB期～V期の一つの古墳に2～3基の土坑が伴い、そのうちの1・2・6・8～10号土坑、20号墳周辺1号土坑から馬骨が出土している。また、ⅢB期～Ⅳ期中里古墳群A1号墳に伴うとみられる2基の土坑からはそれぞれ環状鏡板付轡が、A5号墳の近傍の土坑からもやはり轡が出土している。平面形状はいずれも定型的な長方形となる。土坑は古墳との位置関係からこれに伴う遺構で、形状と轡の出土状況から、馬を埋葬した可能性が高い。さらに諸田仮塚遺跡でもⅢB期の2号墳に伴う4基の土坑が石室の開口方向で確認され、うち4号土坑からは馬の臼歯と環状鏡板付轡が出土している。

船原古墳の1号土坑と後述する5号土坑を除く土坑群の平面形状は長方形ないしは正方形で、特に壁が垂直に近く立ち上がる点は、馬を埋葬した土坑の特徴と共通する。2号土坑は一部が未発掘だが、環状鏡板付轡4セットが床面中央付近からまとまって出土し、最下層の土壌分析ではリンを多く含む骨などの生物遺体が存在していた可能性が示されている。また土層観察では意図的に埋め戻しを行っていることがわかる。こうした状況から、2号土坑には馬を埋葬したものと思われる。

そうした視点で、馬具が出土しない一連の土坑の規模を比較してみると、3号土坑・6号土坑の長軸・短軸は2号土坑の1/2の数値に近く、また4号土坑は2号土坑の長軸の1/2、短軸はほぼ同じで、床面レベルも揃っている。つまり土坑間に一定の規格性が存在

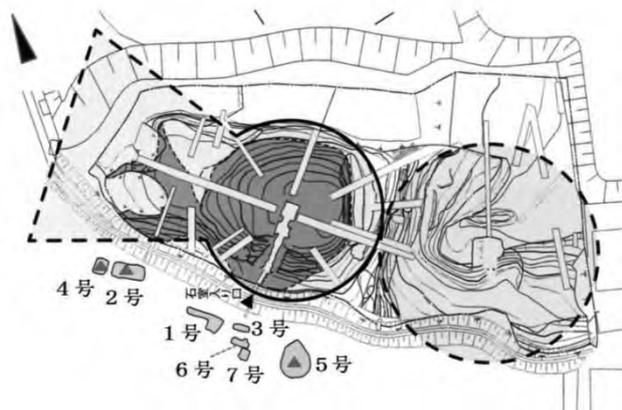
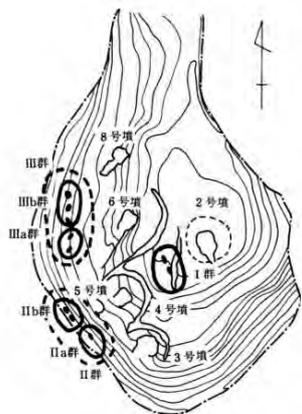
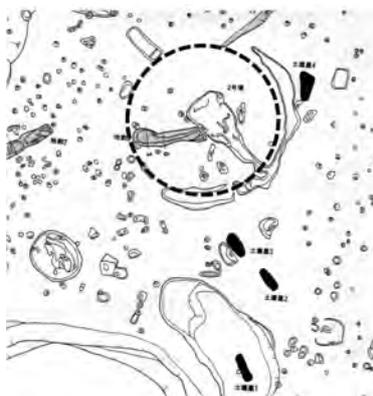


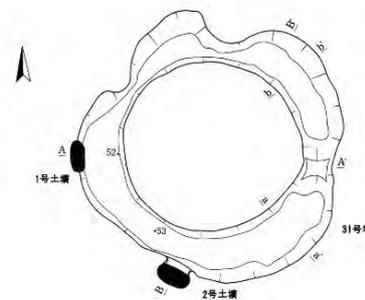
図4 船原古墳と土坑群



三沢遺跡



諸田仮塚遺跡



大作遺跡

図5 馬の埋納土坑の事例

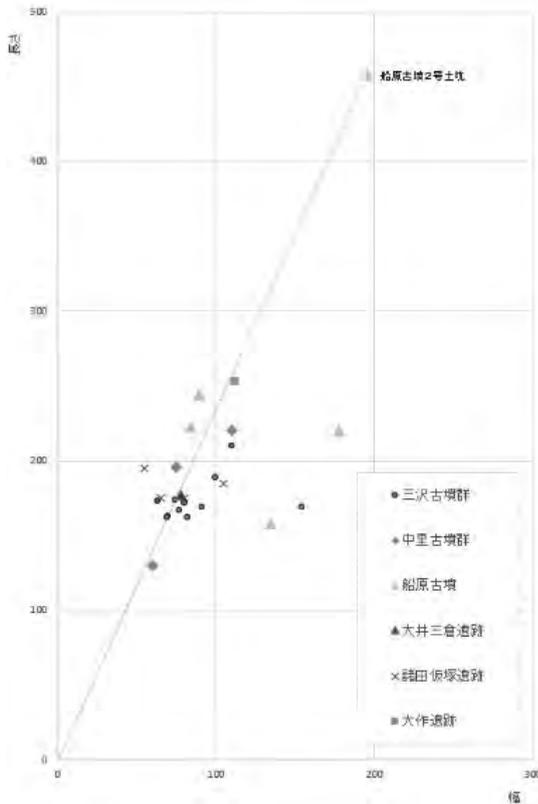


図6 馬の埋納土坑の法量分布

する。そして、上にあげた三沢遺跡など馬を埋葬した土坑の平均値は概数で長軸長 1.8 m、短軸長 0.9 m となり、船原古墳の 3 号土坑・6 号土坑がやや長い傾向を示すものの、機能差に影響が及ばない誤差の範囲に収まる。これらの状況を踏まえて 2 号土坑に 4 組の轡を伴うことを基準とすれば、3 号・6 号が各 1 体、4 号は 2 体分のスペースを有するが、7 号は規格からややはずれる。なお、南端部の 5 号土坑は平面形状がやや乱れ、他の土坑と違って底面がフラットでなく壁の立ち上がりも極めて緩やかであるため一律には扱えない。すべての土坑を馬に関わるものと積極的に評価する根拠には乏しいが、その位置関係と同時性、規格性を鑑みて、それぞれ轡さえも装着していない馬が埋葬されたと考えておきたい。

その上で改めて 1 号土坑の性格を顧みると、その機能面も他の土坑群と関連づけて捉えたほ

うが理解しやすい。1 号土坑では大量の馬具が埋葬品の主体を占め、そのほかに武具や武器、工具が出土している。土坑には生物体を埋葬する痕跡やスペースがなく、遺物の出土状態も木箱に納められる、あるいは北エリアに鞍と鐙・障泥、中央エリアに冑・小札甲など、関連する器種ごとにまとめて丁寧に据え置かれた状況を窺うことができる。要するに、1 号土坑には、他の土坑群に埋葬された馬とともに一連の葬送儀礼で使用された飾馬などに装着されていた什器を埋納したことが想定される。

では、1 号土坑と他の土坑群はどの段階で埋められたのか。それは、被葬者を石室に安置する前後における一連の葬送儀礼の際であることは異論のないところだろう。儀礼の段階としては大きく二分され、第一段階は石室内や墳丘上、前庭部、墳丘外において遺物が



図7 2号土坑の土器出土状況

原位置を保った状態、第二段階はそれらを二次的に移動させる段階となる。後者は儀礼後の土器破碎・散布や、什器埋納などの行為にあたる。船原古墳の 2 号土坑は人為的に一定程度埋め戻され、最終埋没の直前に土師器の甕・高杯、須恵器の甕・高杯・甕の破片を投棄している。2 号土坑最上層のくぼみに一括廃棄された須恵甕は、墳裾出土品や 4・5 号土坑出土甕と接合することから、土坑群の最終埋没段階の同時性が担保される。したがって、墳丘上に供献し儀礼に用いられたものを意図的に破碎した後に、それぞれの土坑に散布する過程が復元できる。周溝や前庭部に儀礼で用いた土器を意図的に散布

する行為自体は一般的にみられるが、地山整形によって築造された船原古墳の場合は、周溝に代わって墳裾の土坑でその行為を執り行っている。このように船原古墳では、第一段階の祭祀として墳丘上の土器供献、第二段階は2号土坑上層の土器群にみえる什器の破碎と散布、そしてその間の段階で土坑群への馬の埋葬と、儀礼で用いた馬具・武具・武器などの什器類の1号土坑への埋納を行った。つまり、1号土坑と他の土坑群は、双方とも儀礼で用いられた什器類を埋納する第二段階に伴う祭祀遺構とみなすことができよう。

(2) 儀礼の復元

多量の副葬品の全容は明らかではないが、公表されている出土遺物（甲斐・岩橋 2019）をもとに儀礼に用いられた馬の数を想定し、儀礼の復元を試みたい。

1号土坑の馬具は、部位ごとのセット数でみると、轡と大型馬鈴のそれぞれ6点が最大数であることから6セット存在する。また、その中には、たとえば鞍には金銅装と木製、鐙には鉄製と木製、雲珠・辻金具にはガラス装飾付・金銅製歩揺付・鉢状などのバリエーションがあり、器種ごとの素材・形態に優劣が存在することがわかる。おそらく馬冑は忍冬唐草文心葉形鏡板付轡・金銅装鞍・ガラス装飾付雲珠・二連三葉文心葉形杏葉などの優品に伴うもので、これらのセットは馬を用いた儀礼の主役を飾る什器とみられる。こうした優品の一部は土坑の北側に偏って、しかも一具のセットをなすように埋納されている。2号土坑からは環状鏡板付轡4セットが床面から出土し、最下層の土壌分析によるリンを多く含む骨などの生物遺体が検出されていることから馬の埋葬坑と考え、3号土坑・4号土坑・6号土坑についても、2号土坑に通じる諸々の規格性から類似遺構とした。土坑から出土した馬具が、仮にすべて葬送儀礼に用いられたという前提に立つならば、1号土坑の優品を装着した馬を筆頭に、その他の飾馬5頭、2号土坑出土馬具を装着した馬4頭、3・6・7号にそれぞれ1頭、4号土坑に2頭の、最大で15頭が儀礼に用いられたことになる。ただしこの数には1号土坑に埋納された装飾馬具を装着した馬も含み、その他の土坑群のスペースから想定した数とは整合しないことが疑問として残る。

ところで、土坑群への馬の埋葬は殉葬であったと考える。2号土坑については、轡の不自然な分布状態から馬の頭部のみを寄せたものだろう。たとえば大刀洗町本郷野開遺跡では、5世紀後半～6世紀初頭の群集墳の墳裾に掘り込まれた土坑に馬を埋葬するが、出土した馬歯の鑑定結果から「現役の乗用馬を殉葬」している（岡崎・西村 2009）。また、千葉県大作遺跡 31号墳の周溝外側に接した土坑では、首を切断した状態の馬の殉葬が認められる（藤崎・田島 1990）。

さて、上に述べたような当時の儀礼を復元するにあたっては、祭祀の状況を再現したとみられる墳丘上の形象埴輪列が分析の素材となる。なかでも埼玉県酒巻 14号墳からは、唯一、蛇行状鉄器形の埴輪を装着した馬形埴輪が出土し（中島 1988）、船原古墳 1号土坑に用いられた遺物群やそれ以外の土坑群の遺物の帰属を考察する際の参考になる。酒巻 14号墳は直径 42 mほどの大型円墳で、墳丘の約 1/3ほどの範囲に限られるものの埴輪の樹立状態を知ることができる。大きくは円筒埴輪列群と形象埴輪列群に分かれ、後者では美豆良を結って鎌を背負った馬飼と思われる



図 8 大作遺跡の殉葬馬想定図

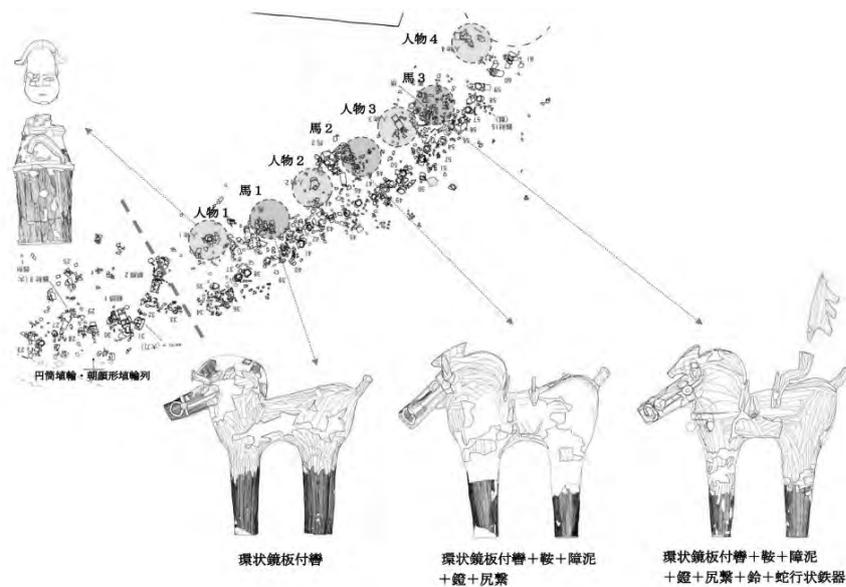


図9 酒巻14号墳の埴輪の配列

人物埴輪を先頭にして、馬1→人物2→馬2→人物3→馬3→鬘→人物4という配列となる。埴輪に表現された装飾馬具に着目してみると、馬1は裸馬で環状鏡板付轡を装着し、馬2は轡に加えて鞍・障泥・鐙・尻繫、そしてその後列の馬3にはさらに鈴の装飾馬具が加わり、鞍には蛇行状鉄器形埴輪

が伴っている。つまり、実際の儀礼において用いられた馬にもそれぞれの役割に応じた馬具が伴っていたことがわかる。和歌山県大谷古墳では「装飾的要素の強い飾り馬用の馬具、(中略)飾らない乗馬用の馬具」(千賀2004)という二種類の馬の存在が指摘され参考となる。これらの状況を船原古墳にあてはめると、たとえば先頭の環状鏡板を伴う馬1は船原古墳で4セットの轡を出土した2号土坑に、後列の馬3は蛇行状鉄器ほか多数の絢爛豪華な馬具を出土した1号土坑の出土状況とイメージが重なる。要するに、船原古墳の土坑群は、葬送儀礼における馬の役割に応じてブロックごとに分散させた遺構と理解したい。したがって、1号土坑は儀礼段階で参列した馬を飾った什器や使用された武具・武器類を、2号土坑は葬送儀礼に参加した轡のみの裸馬を、その他の土坑には飾りを外された馬もしくは轡さえも装着しない馬が殉葬されたと考える。なお、3号土坑には馬を埋葬した痕跡が認められないため、装飾品を外されたのちに近接する土坑に埋められたのか、主と一緒に石室に葬られたか、あるいは飾馬として儀式に参加するだけの役割であったのか定かではない。いずれにせよ酒巻14号墳から復元した人物・馬の配列傾向は、船原古墳の埴輪に沿うように配置された土坑群の意味を特定する際の一つの視点にはなるだろう。

4 遺物の系譜

墳丘上や1号土坑を中心として出土する遺物群は、船原古墳の被葬者を絞り込む過程での有力な情報となるため、その前提として以下に概観しておく。

(1) 種別ごとの系譜

①土器類

墳丘くびれ部から出土した土師器高杯は、長脚気味で杯部が屈曲し大きく外反する重藤分類の高杯Eaタイプで(重藤2009)、6世紀後半から7世紀初頭にかけて、古墳では主に墳丘や墓道での祭祀に使用された。出土する範囲は宗像地域を核として隣接する若宮盆地や遠賀川下流域に濃密に分布し、船原古墳はその分布域の核となる第I領域に含まれる(小嶋2012)。

船原古墳出土の須恵器有孔器台は破片ではあるが、円形の透かし孔を体部に規則的に配置する。この種の土器は沖ノ島4号遺跡（岩陰祭祀）や大島御嶽山遺跡（露天祭祀）に用いられるなど、これまで確認されている7遺跡も胸形君の領域を示す（井浦2017）。そしてその存在は、単に船原古墳が胸形君の領域内に築造されたことを示すのみならず、被葬者と胸形氏との直接的かつ深い関係性を示唆する資料となる。

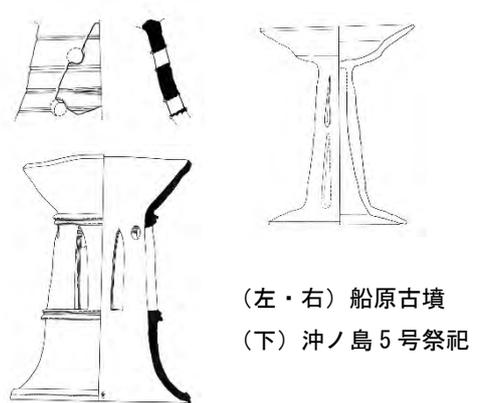


図10 有孔器台と宗像型高坏

②馬具類

a. 馬胄

国内での出土例は大谷古墳（5世紀末）と埼玉県将軍山古墳（6世紀中 - 後半）の2例のみ。いずれも伽耶系と考えられている（太田1994）。韓国では20例ほど事例があり、伽耶地域に多い。船原古墳の馬胄は面覆部・頬当部・庇部からなり、6枚の部材で構成されている。鼻先を大きく打ち出す形態や構造が大谷古墳の事例に似るが、側板・頬当に鉸具が付くこと、側板と頬当の接続に蝶番を使うことなどの差異が認められる。一方、韓国の出土例の中では慶州皇南洞古墳群109号墳第4槨（4世紀末 - 5世紀初）、慶尚南道玉田28号墳（5世紀中頃）、玉田M3号墳A（5世紀末）が構造的に近い。

b. 蛇行状鉄器

馬の鞍に装着する旗差し用の馬具で、国内では8遺跡11例の出土事例がある（東1991）。将軍山古墳を除くとすべて西日本に分布する。韓国では5世紀末から6世紀末にかけて、9遺跡13例のほかにも4例の伝製品が知られる（金井塚2004）。慶尚南道の伽耶地域に多く分布し、三国時代の金冠塚・金鈴塚・天馬塚などの慶州の王陵級の古墳からも出土している。

旧宗像郡内の二例を見ると、宗像市大井三倉遺跡5号墳の蛇行状鉄器は横穴式石室の玄室右袖にU字部分を下にして立てかけるように（酒井1987）、つまり使用する状態で置かれていた。この古墳は群集墳を構成する径12mの円墳で、群中のほかの古墳と比べて顕著な格差があるとはいえない。また、福津市手光古墳群南支群2号墳では前室左側壁際から出土した。径20mほどの円墳で、鉄鏃や鉄矛のほか馬具の中には鉄地銀張帯金具が出土している（伊崎1981）。群の中では盟主墳的な存在である。

c. ガラス装飾付金銅製雲珠・辻金具

船原古墳ではガラス装飾付金銅製雲珠1点と辻金具が9点出土しているが、国内において類例はない。雲珠ではないが、奈良県藤ノ木古墳



図11 船原古墳の馬胄



図12 手光南2号墳の蛇行状鉄器

(6世紀後半)では金銅龍文飾金具の龍眼や、金銅装鞍金具にガラスが嵌め込まれている。なお、板ガラスは宮地嶽古墳や正倉院御物に類例がみられる。韓国では慶州皇南大塚や金冠塚の馬具類にガラス装飾の事例がある。

d. 金銅製歩揺付飾金具

この種の飾金具は雲珠・辻金具で、座の周囲に小型の柱を巡らせるものは類例がない。歩揺が付いた飾金具の国内での出土例は9遺跡で、うち沖ノ島の4号・6号・7号・8号で計86点、藤ノ木古墳46点、そのほか群馬県綿貫観音山古墳で多数出土している(東1990)。韓国での類例は、皇南大塚・金鈴塚・銀鈴塚・天馬塚など慶州とその周辺の新羅地域を中心に分布し、伽耶地域の慶尚南道夫婦塚では蛇行状鉄器と共伴している。慶州の出土品の心棒に装着される吊手金具の多くは、船原古墳例とは異なり、棒状の素材を中央で折り曲げて屈曲部を円環状に整え歩揺を垂下する構造が多いように見受けられる。座金は唐草文の透かしが入った六角形で、比較的近いものとして国内では藤ノ木古墳(勝部1990)や静岡県賤機山古墳(後藤・斎藤1953)に六角形と八角形の二種がみられる。また、韓国では慶尚北道昌寧10号墳で六角形の座金の周囲に唐草文が施されたものが存在する。船原古墳のように大型の柱のまわりに小型の柱を配置するものは皆無であるが、歩揺付飾金具を出土する古墳の多くに大小の別がみられることから、それらを一体化させたオリジナルで、半島製品の意匠を真似た国産品なのかもしれない。

e. 玉虫杏葉

二連三葉文心葉形杏葉には玉虫の翅による装飾が確認された。玉虫の翅を用いた装飾品は、国内では沖ノ島7号遺跡の金銅製帯金具と鉸具(7世紀前半)や、奈良県法隆寺金堂の玉虫厨子(7世紀中頃)、正倉院御物の刀子(8世紀)などの例が知られる。韓国では慶州皇南大塚南墳、同北墳(5世紀中頃)、金冠塚(5世紀後半)で杏葉のほか雲珠や帯金具の装飾として使われている。

(2) 系譜のまとめ

船原古墳出土品のうち土器に関しては、Eaタイプの宗像型高杯を用いた墳丘祭祀を行っていることから、被葬者が宗像氏の構成員と位置づけられていたことが認識できる。また、沖ノ島や、手光波切不動古墳など胸形君系列の首長墓で限定的に用いられる有孔器台の存在がある。加えて、宗像型高杯に三角形の透かし孔を二段に入れる特徴について、沖ノ島5号祭祀などで用いられた器台の透かしの形態を採り入れたものとするれば、胸形君が祀りを司る意味合いが強い有孔土器と同じ位置づけとなり、胸形君にきわめて近い存在の被葬者像を描く材料となる。

類例が限られている馬具類の出自をみると、馬冑・蛇行状鉄器など伽耶地域に由来する

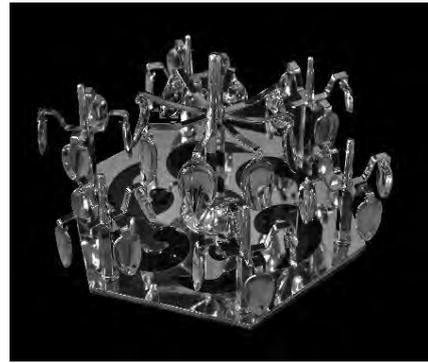
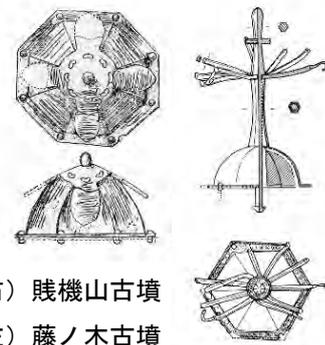


図13 船原古墳の金銅製歩揺付飾金具



(右) 賤機山古墳

(左) 藤ノ木古墳

図14 金銅製歩揺付飾金具

ものと、ガラス製雲珠・金銅製歩揺付飾金具・玉虫杏葉・鳳凰文心葉形杏葉など、主として新羅地域に出自が求められるものがある。船原古墳の時期はすでに伽耶は新羅に併合されている段階であるが、両地域に特徴的な遺物を含む。

5 特殊遺物の出土状況をめぐって

(1) 類例とあり方

ここでは、1号土坑から出土した馬胄・蛇行状鉄器・金銅製歩揺付飾金具について、いくつかの共伴事例をもとに遺物自体が示す意味合いを確認しておく。

①馬胄

大谷古墳では、組合式家形石棺を直葬する際に金銅製鞍や馬甲、垂飾付耳飾などが棺の内外に納められた。馬胄・馬甲は石棺の掘方の際付近に埋納している。遺物群には「装飾的な要素の強い飾り馬用の馬具、(中略)飾らない乗馬用の馬具」の二種が存在する(千賀 2004)。將軍山古墳では、横穴式石室内の木棺外の頭部付近に半島系遺物である突起付胄・木製鞍・輪鐙などが、肢体脇の馬胄を挟んだ両側に蛇行状鉄器が、石室・木棺の側壁際には鉄矛や鉄鏃が配置されていた。轡の数からみると馬具は3セットあったと思われる。韓国では、玉田M3号墳(趙・朴 1990)の木棺小口板外側の頭部と足元に納められている。馬具は3セット認められる。

②蛇行状鉄器

將軍山古墳では、横穴式石室の木棺外の被葬者の頭位横に突起付胄と挂甲が配置され、蛇行状鉄器は肢体側におかれた馬胄を挟んだ両側から出土している。また、飛鳥寺では、推古元年(593)

埋納物として2点の蛇行状鉄器・挂甲・大型馬鈴などが埋納されていた(田沢 1958)。蛇行状鉄器は大型馬鈴とともに心礎上面の南西隅に、挂甲と肩甲は心礎東端部に、ともに舍利埋納後に置かれている。

韓国では、玉田M3号墳で、竪穴式石槨内の木棺外の頭部近くに馬胄、足元

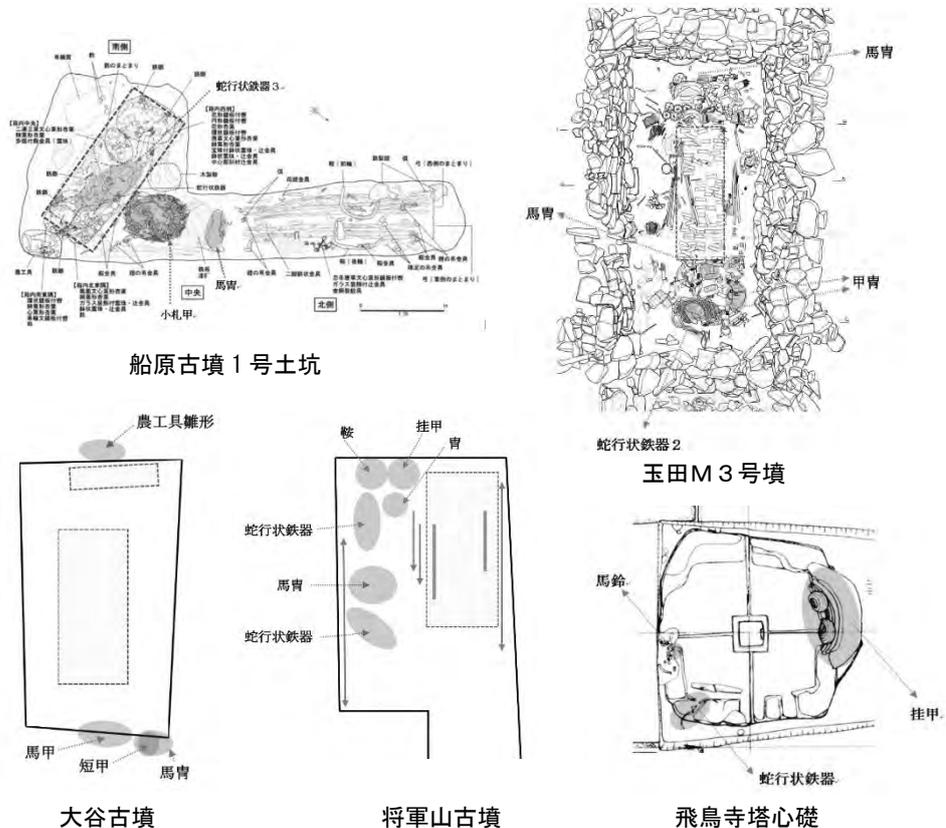


図 15 馬胄・蛇行状鉄器・武具の出土状況

に馬冑・突起付冑・挂甲と蛇行状鉄器 2 点が副えられている。

③金銅製歩揺付飾金具

国家的祭祀を行った沖ノ島や、藤ノ木古墳、賤機山古墳、群馬県綿貫観音山古墳の石室内から、それぞれ他の馬具類とともに多数出土している。

(2) 遺物の解釈

船原古墳 1 号土坑出土品と共通する遺物のうち、大谷古墳（馬冑）と將軍山古墳（馬冑・蛇行状鉄器）の特殊馬具の出土状況は、いずれも被葬者が装着したであろう武具、そして多数の武器とセットで被葬者の傍らの棺外に副えられている点で共通する。飛鳥寺（蛇行状鉄器）の事例の場合、舍利と舍利荘厳具の埋納が仏教の本質に沿った行為というよりも、むしろ『日本書紀』に見える建立経緯から窺えるように、物部氏に対する戦勝祈願という、蘇我氏の軍事氏族らしい側面を有していると解釈できる。大谷古墳では蛇行状鉄器を、飛鳥寺塔心礎埋納物は馬冑を欠くが、いずれも被葬者が戦闘時に身にまとっていた甲冑が同様の扱いを受けていて、これらの品はそれぞれの祭祀を司った者に共通する観念に基づいて副葬・埋納されたとみられる。そしてその組み合わせは、倭の対半島政策に関わる特定の職掌を有する地域首長にとって、おそらくは三種の神器ならぬ威信具のセットと捉えられていた。甲冑・馬冑・蛇行状鉄器が共伴する例は韓国においては現在のところ玉田M3号墳のみであるものの、日韓に共通の観念であったと考えられよう。つまり特殊埋納物と儀礼には、祭祀の主宰者の軍事的側面における威容の誇示とそれによる領域統制の意図が込められている。なお、甲冑のうち、將軍山古墳と、金銅製歩揺付飾金具が多数出土した綿貫観音山古墳、そして玉田M3号墳では突起付冑を伴っていることは注意される。

さて、船原古墳では石室内からも金銅製品が出土していることから、埋納された特殊馬具や甲冑を埋葬施設から出土する大谷古墳や將軍山古墳と一律に「副葬品」と解釈するわけにはいかない。ただ、遺物群の構成と取り扱いに共通の観念が内在することから、いずれの特殊遺物も、生前の主人の威容の誇示と同時に儀礼に参列する者を畏怖させるための威信具と位置づけることができる点では合致する。こうした武具・特殊馬具などに特別な意味合いを持たせた遺物群ではあるが、船原古墳の場合、1号土坑に限っても馬具が6セットと存在感が際立っており、また馬の殉葬土坑の数の多さという点にこそ被葬者のより詳細な性格を示すヒントが隠されている。これについては後述する。

6 特殊馬具等の保有者像

(1) 階層性

前章で列挙した遺物からは、いずれも所有する被葬者の限定的な性格の一端を窺い知ることができる。その好例が玉田M3号墳である。蛇行状鉄器と馬冑が共伴する玉田M3号墳は径 20 m ほどの楕円形墳で、墳丘規模はそれほど大きくはないが多羅國の王陵級の古墳に位置づけられている。国内で同じく両器種を伴う將軍山古墳は武蔵国造系列の奥津城に比定される埼玉古墳群の一角を占める 90 m の前方後円墳である。また、馬冑が出土した大谷古墳は 67 m の前方後円墳で、紀臣の奥津城にあたる。そして金銅製歩揺付飾金具は、皇族ないしは政権に極めて近い有力氏族が被葬者と想定される藤ノ木古墳から出土し、綿貫観音山古墳も 97 m に及ぶ上毛野屈指の前方後円墳である。さらに国家的祭祀の場である沖ノ島に多数存在することから王権との関わりが知れる。飛鳥寺は蘇我氏の氏寺とはい

え、建立を發願した蘇我馬子は崇峻天皇を擁立できる立場にあり、かつ天皇家と外戚関係を結ぶほどの政権中枢の中央氏族である。このように、特殊馬具の所有者は地方の有力首長層や政権中枢の有力氏族に集中している。一方で、宗像地域の大井三倉古墳のように群集墳を構成する小規模な古墳からも出土しているが、そうしたものは胸形一族の領域内に存在するため特殊事情が勘案できよう。

上記以外にも、ガラス装飾付金銅製雲珠・同辻金具など船原古墳から出土する特殊馬具類は、藤ノ木古墳や、沖ノ島祭祀に用いられるなど、保有者・使用者の階層がきわめて限定的である。船原古墳1号土坑には、他に類をみないほどの質量の金銅製装飾馬具が存在するが、玉虫の翅を用いた装飾付杏葉が確認されたことはさらに船原古墳の価値を高めるものと評価できる。玉虫装飾は沖ノ島、法隆寺金堂の玉虫厨子、正倉院御物にしか類例がなく、また韓国の出土例においても所有者は王陵や王族墓に限られ、金銅製品の上位に位置づけることができる。

(2) 被葬者像

前項において特殊馬具を保有する被葬者の階層が極めて限定的であることが知れた。以下に具体的な被葬者像を描いておきたい。

大谷古墳は紀ノ川下流域右岸の河口近くに位置する前方後円墳である。この地域は皇別氏族である紀臣の奥津城と考えられ、近傍には国内最大級の大型総柱建物群9棟が建ち並ぶ鳴滝遺跡や多量の陶質土器を出土した楠見遺跡が位置する。そして紀ノ川を挟んだ対岸には紀直の奥津城となる岩橋千塚古墳群が存在する。欽明23年(562)紀男麻呂は百濟復興のために新羅と交戦し、崇峻天皇4年(591)にも巨勢猿などとともに大將軍として百濟復興のために二万の軍勢を率いて筑紫に派遣された。それ以前の5世紀代にも紀小弓宿禰が朝鮮半島へ出兵するなど、紀ノ川河口近くを拠点とする紀氏はヤマト王権下の朝鮮半島派兵の窓口的な役割を担っていた。一方、將軍山古墳は武蔵国造系列の奥津城に比定される埼玉古墳群に含まれる。先行する稻荷山古墳からは獲加多支鹵(雄略天皇)銘の金象嵌鉄劍が出土し、その銘文から、代々大王の杖刀人として仕えていたことが知れる。また、綿貫観音山古墳は、北朝の北齊の貴族、庫狄廻洛墓(562年没)から出土したものと類似する形状の銅製水瓶や寧王陵と同型の獸帯鏡などのほか、大陸や半島との関係を示す馬具類を含む多量の遺物を伴い、やはり王権下で対外交渉を担った被葬者像が浮かび上がる。さらに飛鳥寺を建立した蘇我氏は、記紀に記される神功皇后の新羅征討で名高い武内宿禰を祖とする軍事的氏族の末裔で、馬子が行った飛鳥寺の仏舎利と莊嚴具埋納にかかると一連の儀礼にも物部氏に対する戦勝祈願という軍事氏族らしい側面を具備している。

こうした品々の入手経路を一括して論じることはできないが、公式の日韓交渉で得たものを王権から下賜される場合のほか、地方豪族が朝鮮半島首長層との個別交渉による接触においてダイレクトに入手したものも含まれているだろう。いずれにせよ、船原古墳の特殊遺物と構成要素を一にする古墳の被葬者や寺院における祭祀の主宰者たちが保有する特殊遺物は、大局的には一地方首長の朝鮮半島諸地域との交流という範囲にとどまって解釈できるものではなく、主としてヤマト政権の半島政策という枠組みの中での成果品といえる。そしてそれらの被葬者の職掌をみると、朝鮮半島への派兵拠点としての任務を掌った紀氏や、雄略天皇の杖刀人の系譜をひく東国の有力首長など、政権下における軍事的な役割の重要性が強調できる。

7 船原古墳の被葬者

(1) 糟屋屯倉との関係

筑紫国造磐井の乱の翌年の継体天皇 22 年（528）、子の筑紫葛子によって糟屋屯倉がヤマト政権に献上される。その比定地に関しては、玄界灘に面し官衙的な大型掘立柱建物群と倉庫群が確認された鹿部田渚遺跡にあてる説がある。一方、船原古墳の被葬者については、「同様な小型の前方後円墳ではほぼ同形式の馬具を出土した奈良県桜井市珠城山 3 号墳が、倭屯倉の管理者集団と考えられることから



図 16 鹿部田渚遺跡

類推して、当然、糟屋屯倉の管理者であったと考えられよう」とする見解がある（桃崎 2016）。鹿部田渚遺跡が磐井の乱後の 6 世紀中頃以降に港湾施設として重要な役割を担っていたことは確実であり、その管理者は鹿部田渚遺跡が面する花鶴川の支流域に占地した、地域唯一の前方後円墳である船原古墳の被葬者の可能性は高い。しかしながら他方で、糟屋評衙（粕屋町阿恵遺跡 / 7 世紀後半）と、石屋形を有する可能性の高い鶴見塚古墳（6 世紀後半）の関係が、那津官家（福岡市比恵遺跡）とその管理者と思われる東光寺剣塚古墳の関係に重複するという指摘がある（西垣 2018）。これを踏まえた上で、糟屋評衙と船原古墳との距離的な隔たりや、船原古墳が胸形君によって掌握された旧宗像郡内に



図 17 糟屋評衙（左）と推定那津官家（右）

位置することを考え合わせるならば、船原古墳と糟屋屯倉の管理者を直ちに紐づけることには躊躇せざるを得ず、鹿部田渚遺跡は第一義的には胸形君が掌握する対外交渉の拠点の港湾施設との位置づけにとどめておきたい。

(2) 被葬者像

船原古墳の埋葬儀礼には、領域内の統制手段としては程度を超える絢爛豪華な装飾馬具が用いられた。冒頭に述べたように墳墓の形態や規模が直接ないしは間接的に王権の統制下にあったとすれば、葬送儀礼の規模や、保有・使用できる什器類についてもまた一定の規範や規制のもとに執り行われたことが想定される。つまり、船原古墳の主の埋葬に参列したであろう胸形氏の首長たちも領内におけるそうした什器の保有・使用を認知していたことが、船原古墳に葬られた人物像を探る上での前提となる。

前章までに、特殊馬具類と武具を伴う古墳等の被葬者像が、政権下で軍事面を担う職掌と連動していることを指摘した。仮に船原古墳の被葬者が、特殊馬具類の保有・埋納形態を一にする他の軍事的氏族と同様に胸形君直属の指揮官や部隊の統括者だとすれば、有力氏族の奥津城、つまり津屋崎古墳群内に墓域が与えられるべきである。しかし、船原古墳が胸形氏の領域の南のはずれに造営されていることを踏まえると、半島への出征という直接的な軍事行動に携わった人物とは考えにくい。それでいて超一級の埋納物を保有する立場にあることから、船原古墳の被葬者はすでに指摘がなされているように「馬匹管理に関

与した首長」(桃崎 2016)で、1号土坑に埋納された絢爛豪華な馬具類と多数の馬の殉葬土坑群の存在は、馬飼集団の統括者として新羅あるいは旧伽耶勢力に対する軍馬の提供という間接的な軍事支援を行った職掌を反映している。換言すれば、馬飼という特殊な職能を有した船原古墳の主は、各地の牧から馬匹を集積・搬送する利便のために官道と港湾にほど近い土地を宗像君によって与えられ、朝鮮半島に軍馬を供給する役割を担った武人といえよう。日本書紀によれば、継体天皇6年(512)に筑紫の馬40匹を百濟救援のために贈る。また欽明天皇7年(546)から17年(556)にかけても馬を含む救援物資を提供するなど、その後も倭は半島における勢力間の領土確保のせめぎ合いに際して、軍馬の供給という形の後方支援を頻繁に行っている。王権の意思による具体的な行動にあたっては地方豪族を介することになる。船原古墳の被葬者がそうした役割を担ったという想定は、1号土坑の6セットの馬具に加え、通常1古墳に殉葬馬坑が1～2基であるのに対し、船原古墳では数が突出している状況からも理解しやすい。ただ、その根拠とした船原古墳の土坑群の性格については、未発掘の土坑も含まれているため現時点ではあくまで推測の域を出ない。古代律令期において牧は軍事関連の事案を統括した兵部省の管轄にあり、大宰府には兵馬所・兵馬司が置かれるとともに、西海道の諸国牧から集められた近都牧も設置されていた。牧の設置時期や制度がいつまで遡るか詳らかではないが、少なくとも5世紀以降は、段階的に、ヤマト政権による組織的な軍馬の生産や馬匹集団の管理体制が整備されていたことが推測できる。

崇峻天皇4年(591)の任那の再興にかかる紀男麻呂などの派兵は、結果的には崇峻天皇暗殺により半島への進軍は叶わなかったが、筑紫の地が出兵拠点であったことが知れる。その海北道中のルート上に位置する壱岐島は、双六古墳や笹塚古墳など新羅系の金銅製馬具や新羅土器、そして共伴する畿内系土師器の関係が示すように、ヤマト政権の対外交渉にあたって重要な役割を担っていた(吉村 2000)。こうした様相は船原古墳の被葬者像と重なってくる。朝鮮半島からの使者を迎える際には「飾馬の長」も兼ねただろう。船原古墳のような「見瀬丸山型前方後円墳」が欽明朝に外交関係で活躍した地域首長(土生田 2012)との見解があることもまた被葬者像を探るひとつの手がかりとなる。森下靖士・甲斐孝司の両氏は船原古墳の新羅系馬具について、新羅が大伽耶を併合する直前にあたる560年頃からはじまった「新羅の調」(560年頃～)の一端であった可能性を指摘している(森下・甲斐 2016)。ただ、船原古墳1号土坑に埋納された朝鮮半島系遺物のすべてが公的外交ルートを通じた「新羅の調」と一括することはできない。たとえば敏達8年(579)から敏達11年(582)の間には新羅が調を進めるが倭が受納しなかった状況もあり、国家間外交に介在する胸形君と新羅、あるいは新羅に併合された旧伽耶地域を含む有力首長層と船原古墳の被葬者との直接的な交渉過程で築かれた関係性において入手できた品々も含まれているだろう。また、馬冑・蛇行状鉄器の入手経路と土坑への埋納の意義を位置づける上で、馬の武装具の意義を中国史料から考察した門田誠一氏による、「王侯の交渉に際しても贈与の対象とされ、(中略)朝鮮半島南部地域では、高位階層による領域内の統制手段として用いられている」という指摘(門田 2006)は重要な視点となる。1号土坑から出土するような遺物群は石室内に納められることが通例だが、祭祀の主宰者が、領域内の統制手段の側面において参列者に対し最大限の視覚的効果を与える壮麗な儀礼後に、一連の行為として儀礼に用いられた馬とともに墳丘の裾で埋納するに至ったものと解釈してお

きたい。そして、当該地域に先行する有力首長墓が確認されていない状況を鑑みて想像を逞しくするならば、馬匹集団の統括者となった船原古墳の被葬者の出自は、激動の朝鮮半島情勢の中で亡命もしくは招聘された人物で、胸形君を介して半島政策に寄与したと考えられる。

船原古墳出土の遺物整理は現在も進行中であり、その成果の公表を俟って再考できれば幸いである。資料作成にかかる関係文献の収集にあたり、井浦一・岩橋由紀・甲斐孝司・下原幸裕・白木英敏の諸氏のお手を煩わせたことを、末尾ではありますが記して深謝いたします。

引用・参考文献

青木敬 2016「日韓王陵古墳における墳丘の特質と評価」『日韓文化財論集』Ⅲ 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 1-29 頁

東潮 1990「馬具の系譜—歩揺付雲珠形飾り金具と馬装」『斑鳩藤ノ木古墳 第一次調査報告書』奈良県立橿原考古学研究所 397-425 頁

荒巻宏行 2014『比恵 66』福岡市教育委員会

井英明 2005『楠浦・中里遺跡』古賀市教育委員会

井浦一 2013「手光波切不動古墳の調査成果」『津屋崎古墳群Ⅲ』福津市教育委員会 58-61 頁

井浦一 2017「胸肩君の領域」『季刊邪馬台国』132号 梓書院 56-64 頁

池ノ上宏 2011「まとめ」『津屋崎古墳群Ⅱ』福津市教育委員会 86-97 頁

伊崎俊秋 1981『手光古墳群Ⅰ』福岡市教育委員会

小川泰樹 1998『諸田塚遺跡』福岡県教育委員会

太田博之 1994「埼玉将軍山古墳出土馬冑資料の基礎研究」『日本考古学』第1号 日本考古学協会 103-125 頁

大高広和 2017「古代宗像郡郷名駅名考証(三)」『沖ノ島研究』第三号「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議 1-8 頁

岡崎美彦・西村智道 2009『本郷野開遺跡Ⅴ・Ⅶ』大刀洗町教育委員会

甲斐孝司・岩橋由季 2019『豪華な馬具と朝鮮半島との交流 船原古墳』新泉社

鏡山猛 1958『沖ノ島』宗像大社復興期成会

勝部明生 1990『斑鳩藤ノ木古墳 第一次調査報告書』奈良県立橿原考古学研究所

門田誠一 2006「高句麗古墳壁画における鎧馬図考」『鷹陵史学』32 鷹陵史学会 27-52 頁

金井塚良一 2004「蛇行状鉄器再考」『考古学研究』51-1 考古学研究会 55-75 頁

小島篤 2012「墓制と領域—胸肩君一族の足跡—」『九州歴史資料館研究論集』37 九州歴史資料館 1-26 頁

小嶋篤 2018「前方後円墳の終焉」から見た胸肩君『沖ノ島研究』第4号「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議 19-39 頁

後藤守一・斎藤忠 1953『静岡賤機山古墳』静岡市教育委員会

酒井仁夫 1987『大井三倉遺跡』宗像市教育委員会

重藤輝行 2009「古墳時代中・後期の筑前・筑後の土師器」『地域の考古学』佐田茂先生論文集刊行会 241-272 頁

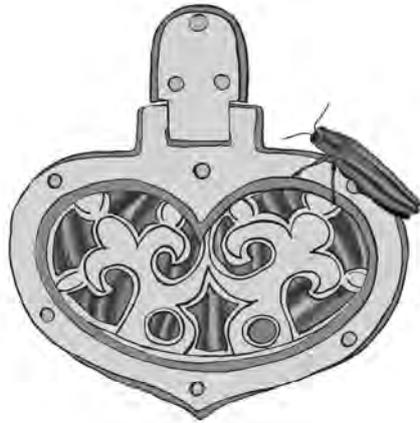
千賀久 2004「日本出土の「非新羅系」馬装具の系譜」『国立歴史民俗博物館研究報告』第110集 国立歴史民俗博物館 283-304 頁

- 田沢担 1958『飛鳥寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所
趙榮濟・朴升圭 1990『陝川玉田古墳群Ⅱ M 3 號墳』慶尚大学校博物館
中島洋一 1988『酒巻古墳群』行田市教育委員会
西垣彰博 2018『阿恵遺跡』粕屋町教育委員会
土生田純之 2012「墳丘の特徴と評価」『馬越長火塚古墳群』豊橋市教育委員会 329-341 頁
藤崎芳樹・田島新 1990『佐倉市大作遺跡』財団法人千葉県文化財センター
松井章 1990「大作遺跡 31 号墳出土のウマ」『佐倉市大作遺跡』財団法人千葉県文化財センター
207-210 頁
宮田浩之 1990『三沢古墳群Ⅰ』小郡市教育委員会
桃崎祐輔 2016『船原古墳の真価を探る』NPO 法人古賀市文化協会
森下靖士・甲斐孝司 2016『船原古墳Ⅰ』古賀市教育委員会
吉村靖徳 2000「北部九州における三室構造横穴式石室の諸相」『古文化談叢』45 九州古文化研究会 151-170 頁
吉村靖徳 2005「石棚雑感」『九州歴史資料館研究論集』30 九州歴史資料館 20-33 頁

図の引用

- 図 1 一大高 2017 を改変
図 2 一池ノ上 2011 を転載
図 3 一森下・甲斐 2016 を転載
図 4 一甲斐・岩橋 2019 を改変
図 5 一三沢遺跡：宮田 1990、諸田仮塚遺跡：小川 1998、大作遺跡：藤崎・田島 1990 をそれぞれ改変
図 7、図 11、図 16 一甲斐・岩橋 2019 を転載
図 8 一松井 1990（岩永省三氏作図）を転載
図 9 一中島 1988 を改変
図 10 一船原古墳：井浦 2013・森下・甲斐 2016、沖ノ島 4 号：鏡山猛 1958 を転載
図 14 一賤機山古墳：後藤・斎藤 1953、藤ノ木古墳：勝部 1990 を転載
図 17 一糟屋評衙：西垣 2018 を改変、荒巻 2014 をもとに吉村 2005 を改変

MEMO



令和2年度 国史跡船原古墳講演会資料集

2020（令和2）年11月28日

発行 福岡県古賀市教育委員会
福岡県古賀市駅東1丁目1番1号

印刷 社会福祉法人 福岡コロニー
糟屋郡新宮町緑ヶ浜1丁目11番1号